

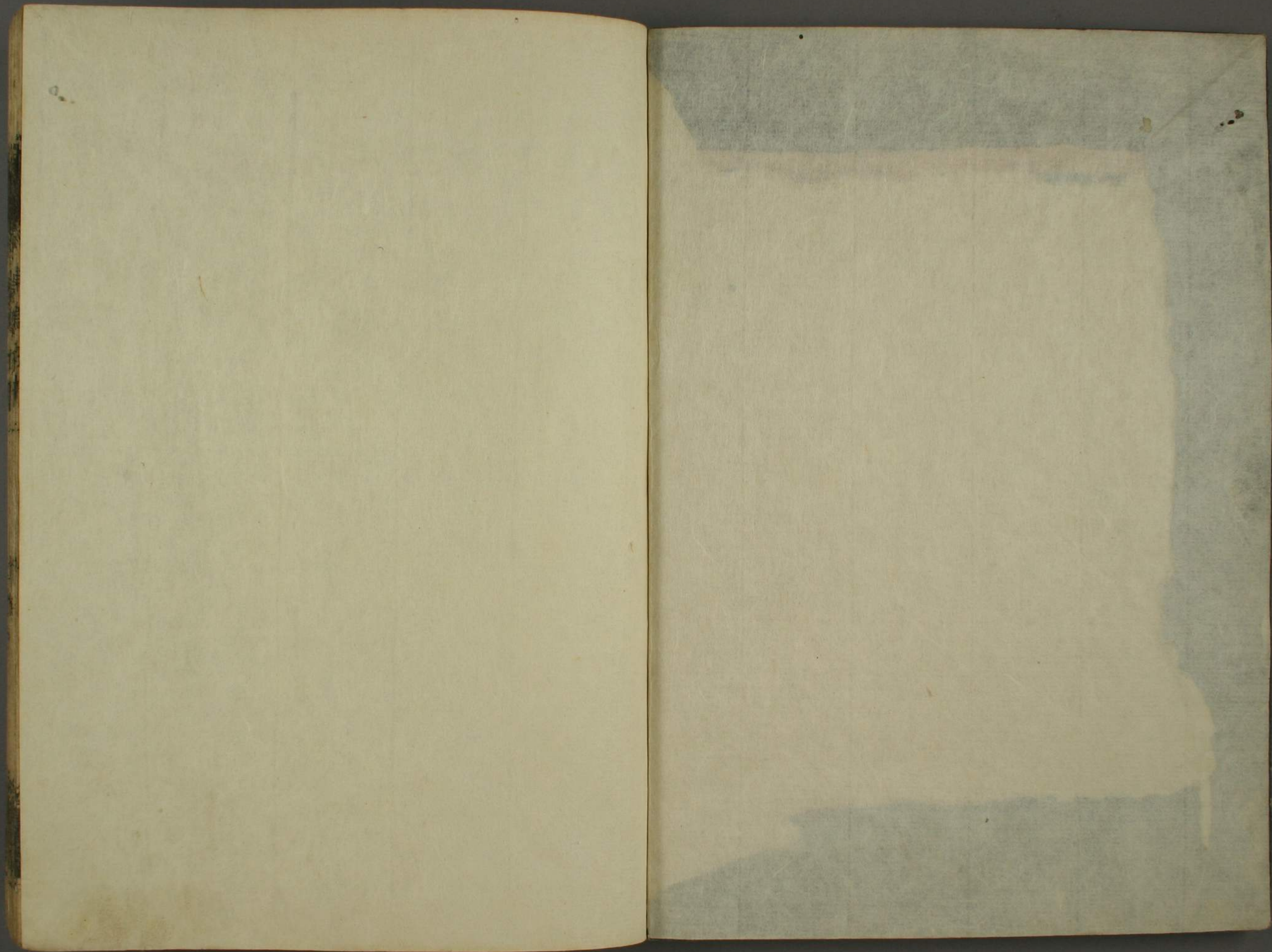


東鑑

伊
402
2A

伊
402
25-25





會同
印政



冊 402
卷 25

新刊吾妻鏡卷第五十一

弘長三年癸亥

正月小

壬午陰

境飯

相州禪室御沙汰

相州以下

著布衣出仕如常申時刻之後各降庭上座列

左馬權頭時宗

相摸四郎宗政

武藏前司朝直

尾張前司時章

越前之司時廣

相摸三郎時輔

同七郎宗頼

遠江前司

相摸左近大夫將監時村

遠江右馬助清時

中務大輔教時

民部權太輔時隆

尾張左近大夫將監公時



陸奥左邊大夫將監義宗

武藏式部大輔時房

越後四郎顯時

陸奥十郎忠時

武藏八郎頼直

備前太郎宗長

武藏九郎朝貞

那波刑部權少輔政茂

和泉前司

武藤少卿

小山出羽前司

越中前司

刑部少輔時基

彈正少弼業時

武藏五郎時忠

駿河四郎兼時

駿河五郎通時

遠江四郎政房

官内權大輔時秀

秋田城介

佐々木壹岐前司

後藤壹岐前司

縫殿頭

長門前司

日向前司

佐々木對馬守

宇都宮石見前司

木上權頭

能登藏人

那波五郎

佐渡新左衛門尉

城六郎兵衛尉

城彌九郎

後藤壹岐左衛門尉

長門三郎左衛門尉

越中六郎左衛門尉

加賀前司

中務權少輔

畠山上野三郎

駿河右邊大夫

義作左衛門大夫

城四郎左衛門尉

上野三郎左衛門尉

佐々木壹岐三郎左衛門尉

越中次郎左衛門尉

越中五郎左衛門尉

信濃左衛門尉

後藤壹岐次郎左衛門尉

遠江三郎左衛門尉

大隅修理亮

筑前三郎左衛門尉

大隅大炊助

大曾禰太郎

常陸左衛門尉

周防五郎左衛門尉

筑前五郎左衛門尉

梶原上野太郎左衛門尉

隱岐四郎兵衛尉

伊勢次郎左衛門尉

伊勢三郎左衛門尉

甲斐三郎左衛門尉

武石新左衛門尉

加藤左衛門尉

紀伊次郎左衛門尉

小野寺四郎左衛門尉

進三郎左衛門尉

小野寺新左衛門尉

内藤肥後六郎左衛門尉

甲斐五郎左衛門尉

佐々木孫四郎左衛門尉

伊賀四郎左衛門尉

狩野四郎左衛門尉

伊東八郎左衛門尉

備後太郎

信濃判官次郎左衛門尉

薩摩七郎左衛門尉

伊賀式部八郎左衛門尉

備後次郎

平賀三郎左衛門尉

備後三郎

周防七郎

天野肥後三郎左衛門尉

足立右衛門五郎

將軍家出御南面土御門大納言

間次進物御劔武藏前司朝直御調度中務大輔教

時御行騰沓宮内權大輔時秀

一御馬 武藏五郎時直 里村三郎兵衛尉

二御馬 城六郎兵衛尉顯盛 同九郎長景

三御馬 出羽八郎左衛門尉行世 同九郎宗行

四御馬 佐々木壹岐三郎左衛門尉頼經

同四郎左衛門尉長經

五御馬 相摸三郎時輔 諏方四郎左衛門尉

未刻將軍家御行始入御相州禪室亭 供奉人

御所御方

御劔役

武藏前司朝直

同五郎時直

尾張前司時章

同左近大夫將監公時

左馬權頭

越前々司時廣

相摸三郎時輔

刑部少輔時基

越後四郎顯時

陸奥十郎忠時

秋田城介泰盛

同九郎長景

和泉前司行方

佐々木壹岐前司綱泰

中務權少輔重教

越中前司頼業

後藤壹岐前司基政

日向前司祐泰

縫殿頭師連

美作左近藏入宗教

小野寺四郎左衛門尉

常陸左衛門尉

信濃左衛門尉

周防五郎左衛門尉

筑前三郎左衛門尉

進三郎左衛門尉

加藤左衛門尉

甲斐三郎左衛門尉

伊東八郎左衛門尉

將野四郎左衛門尉

佐々木對馬四郎左衛門尉宗經

大見肥後四郎左衛門尉行定

中御所御方八葉御車

中務權大夫教時

民部權大夫輔

遠江左馬助清時

刑部權少輔政茂

長門前司

島山上野三郎

城四郎左衛門尉

小野寺新左衛門尉

伊勢次郎左衛門尉

信濃判官次郎左衛門尉

相摸左近大夫將監

武藏式部大夫

相摸七郎

宮内權大夫輔時秀

佐々木對馬前司氏信

大隅修理亮

後藤壹岐前司

梶原太郎左衛門尉

武石新左衛門尉

嶋津周防七郎定賢

御引出物御劔尾張前司時章砂金左近大夫將監時村羽秋田城介泰盛

一御馬相摸七郎宗頼平新左衛門尉頼經

二御馬筑前左衛門尉行實

同五郎左衛門尉行重

二日癸未天晴垵飯相州御沙汰御簾土御門

大納言御劔尾張前司時章御調度越前々司時廣

御行騰和泉前司行方

一御馬相摸左近大夫將監時村

四方田新三郎左衛門尉

二御馬越後四郎顯時糟屋左衛門三郎行村

三御馬城六郎兵衛尉顯盛同九郎長景

四御馬 出羽八郎左衛門尉行世 同九郎宗行

五御馬 越後六郎實政 伊賀右衛門次郎

今日以元日出仕人數為鶴置御祭供奉被下御點

三日 甲申天晴 境飯 武州御沙汰御簾土御門

大納言御劔中務權太輔教時御調度左近大夫將

監公時御行騰太宰權少貳景頼

一御馬 相摸七郎宗頼

安東宮内左衛門尉景光

二御馬 梶原太郎左衛門尉景經 同五郎景方

三御馬 甲斐三郎左衛門尉為成

同五郎左衛門尉為定

四御馬 上野三郎左衛門尉重義

同左衛門五郎宗光

五御馬 陸奥十郎忠時 牧野太郎兵衛尉

五日 丙戌 鶴置御祭供奉人事相催

七日 戊子天晴將軍家御祭鶴置八幡宮供奉人

御車

城彌九郎長景 出羽八郎左衛門尉

後藤壹岐次郎左衛門尉

長門三郎左衛門尉 伊勢三郎左衛門尉

梶原三郎左衛門尉 嶋津周防七郎

越中次郎左衛門尉 武石新左衛門尉

越中五郎左衛門尉 上野三郎左衛門尉

伊賀四郎左衛門尉 狩野四郎左衛門尉
平賀三郎左衛門尉 薩摩七郎左衛門尉

佐渡新左衛門尉

信濃判官次郎左衛門尉行家

以上十七人著直垂帶劔候御車左右

次御後四十九人 布衣

武藏前司朝直

同式部大夫朝房

同五郎時忠

同八郎頼直

越前々司時廣

中務權大輔教時

尾張左近大夫將監

相摸左近大夫將監

氏部權大輔時隆

同四郎宗房

相摸三郎時輔

同七郎宗頼

刑部少輔時基

遠江右馬助借時

越後四郎顯時

陸奥十郎忠時

那波刑部少輔政茂

宮内權大輔時秀

佐々木壹岐前司泰經 同三郎左衛門尉頼經

越中前司頼業

長門前司時朝

後藤壹岐前司基政

同太即左衛門尉

木立權頭親家

同左衛門藏人家教

縫殿頭師連

字佐義日向司祐泰

島山上野三郎

石見前司家朝

常陸左衛門尉

筑後三郎左衛門尉

城六郎兵衛尉

大隅修理亮久時

信濃左衛門尉 御調度後

周防五郎左衛門尉

和泉六郎左衛門尉 同七郎左衛門尉

紀伊次郎左衛門尉 梶原太郎左衛門尉

進三郎左衛門尉辨加藤左衛門尉景經

小野寺新左衛門尉 甲斐三郎左衛門尉

伊東八郎左衛門尉 佐々木孫四郎左衛門尉

伊賀式部八郎左衛門尉

大見肥後四郎左衛門尉

佐々木加地太郎左衛門尉實經

八日 巳丑 於前濱被撰御的射手左典厩依

不被出仕十八人一五度射訖退散云

一番 山城三郎左衛門尉 早河次郎太郎

二番 澁谷新左衛門尉 横地左衛門次郎

三番 伊東與一 富士三郎五郎

四番 松岳左衛門四郎 平嶋彌五郎

五番 伊東新左衛門尉 小沼五郎兵衛尉

六番 小嶋彌五郎 澁谷左衛門四郎

七番 栢間左衛門次郎 本間對馬次郎兵衛尉

八番 落合四郎左衛門尉 神林兵衛三郎

九番 早河六郎 下山兵衛太郎

九日 庚寅天晴 來十二日依可有御弓始被催

撰定之射手來十二日辰尅以前可キ象勤者左典厩

日來御不例今日御疮瘡出見及晚權律師隆政入

減年廿二

十日 辛卯天晴 為和泉前司行方奉行被定旬

御鞞之奉行。皆是所被撰。堪能也。云。

正月 四月 七月 十月

上旬

冷泉中將隆茂朝臣 右馬助清時出羽前司長村

中旬

越前之司時廣 中務權少輔重敏 備中守行有

下旬

足利大夫判官家氏 武藏五郎時忠

下野左衛門尉景經

二月 五月 八月 十一月

上旬

二條少將雅有朝臣 刑部少輔時基

後藤壹岐前司基政

中旬

彈正少弼業時 越後四郎顯時

佐渡大夫判官基隆

下旬

左近大夫將監時村 三河前司頼氏

周防左衛門尉忠景

三月 六月 九月 十二月

上旬

二條侍從基長 相摸三郎時輔

佐々木壹岐前司泰經

中旬

中務權大輔教時秋田城介泰盛信濃判官時清

下旬

左近大夫將監公時 木工權頭親家

城四郎左衛門尉時盛

十一日 壬辰 明日御弓始射手之中小嶋彌次

即家範依申故障彼合手小沼五郎兵衛尉孝幸尚

被止之所被縮五番也而今日工藤一郎右衛門尉

光泰計申云就家範之故障被止孝幸為五番者若

猶臨期於故障輩出來者四手不可然若合早河六

郎祐賴於孝幸如元為六番之條可宜歟者仍有沙

汰如然云所被加彼兩人也

十二日 癸巳 有御弓始射手十二人二五度射

一番 山城三郎左衛門尉親忠

早河次郎大郎祐泰

二番 橫地左衛門次郎師重

對馬次郎兵衛尉忠泰

三番 澁谷右衛門次郎清重 伊東與一祐賴

四番 小沼五郎兵衛尉孝幸 早河六郎祐賴

五番 松田左衛門四郎時家

富士三郎五郎貞時

六番 澁谷新左衛門尉朝重 平嶋彌五郎助經

十四日 乙未 自來廿一日依可有御祈為左太

臣法印休所可被點出羽入道々空家之由云

十五日 丙申 兩小常降入夜属晴丑刻月蝕正

見八分御祈加賀法印定清。

十七日 戊戌 紅霞纏自雲天氣甚暗戌刻乾巽有如火光色一方光盛之時一方光薄亦相交厚薄觀者怪之。

十八日 己亥陰 乾巽亦光如去夜御祈大阿闍梨休所事道空家者去北躡正少粥給之畢常陸入道家者來月二所御參詣御物等沙汰奉行之間今日被點後藤壹岐前司家。

廿日 辛丑 近日依可有二所御參詣供奉惣人數如例注進之云。

廿三日 甲辰 二所御參詣供奉人等事條之被經沙汰先日被下御點人數之中多以有申障事等。

所謂

武藏前司 越中前司 民部權大輔

中務權大輔 秋田城介 同四郎左衛門尉

佐々木對馬守 縫殿頭 大須賀新左衛門尉

出羽九郎

以上十人雖申所勞之由當出仕之上相扶可

象之由云

足立左衛門太郎 宮内權大輔

佐渡大夫判官 周防五郎左衛門尉

後藤壹岐左衛門尉 甲斐三郎左衛門尉

同五郎左衛門尉 小野寺新左衛門尉

近江左衛門尉 和泉六郎左衛門尉

同七郎左衛門尉

進三郎左衛門尉

大泉九郎

足立左衛門五郎

以上十四人。申障之由。可尋問其子細之由云。

相摸左近大夫將監

信濃判官

大隅修理亮

畠山上野三郎

隱岐四郎兵衛尉

小野寺四郎左衛門尉

足立太郎左衛門尉

大須賀新左衛門尉 在國

以上八人者鹿食云。不申暇之條同。可尋問之

由云。

城六郎兵衛尉 食鳥

子細同前

以上如此

於鹿食事者先被尋問之處。不承及禁制事由各

陳謝云

廿五日 丙午 二所御衆詣事延引於今度者先

可被用奉幣御使也。先自至進奉供人者悉以可候

御精進中之由。可相觸之旨。被仰小侍武藤少卿景

頼傳仰云。

二月大

二日 壬子 小雨降。入夜庭上雪白。於御所。有當

座和歌御會。是臨時之儀也。然而相州令衆給繹及

曉更。

五日 乙卯 自明日。依可有御祈。為大阿闍梨左

大臣法印休所。被點和泉前司行方家云。

八日 戊午天晴 申剋雨降。今日於相州常盤御

亭有和歌會。一日千首操題被置懸物亭主。十八首
右大辨入道真觀。百入首。前皇后宮大進俊嗣。朝光後
息五。掃部助範元。百首。證悟法師良心法師以下候
者十七人。辰尅始之。秉燭以前終篇。則披講範元一
人勤其役。

九日 已未天晴 昨日千首和歌為合點被送大

拯禪門云云。

十日 庚申 朝間雨降被千首合點之後於常盤

御亭更被披講。今夜以合點負數被定座次第。一座
辨入道第二範元第三亭主第四證悟也亭主以範
元下座之儀。可若對座之由被稱之處。大拯禪門云
以合點負數可守其座次之由。治定先訖。而非一行

座者頗可為無念歟云。其詞未終。亭主起座欲被著
干範元之座。下于時範元又起座逐雷之處。即令入
抑留之。給又任點數。分懸物大拯禪門分被置虎皮
上。範元熊皮亭主色革以下。准之無點之輩。儲其座
於緣。雖羞膳撒箸之間。無箸而食之。滿座莫不解頤。
掃部助範元者。去正月為上洛。雖申暇。依此御會內
內被留之。懸物之中。於旅具者。悉以拜領之。

三月小

十日 庚寅天晴 故右京兆 義 御願大倉藥師
堂。日來加修造。今日被遂供養。真言 道師遠江僧都
公朝。

十三日 癸巳 武藤少卿遣奉書於小侍所別當

云二所御精進自來月廿一日可被始也御共并衆
籠人々如先度有御催促可被詳進且鳥食自今月
廿日之比可有憚兼日可被相觸云

十七日 丁酉 最明寺禪室買得信濃國深田郷

今日寄附善光寺所被充置不斷經衆不斷念佛衆
等糧料也備思食來世值遇云

善光寺金堂不斷經衆結番事

合 次第不同

定蓮房律師觀西

蓮明房善西

理乘房寶圓

嚴蓮房聖尊

理久房阿闍梨重實

大貳阿闍梨覺玄

嚴光房證範

覺地房有慈

金蓮房勝賀

蓮淨房覺隆

河内公俊榮

權別當俊範

右守番帳之旨可令勤仕但彼不斷經用途者水由
六町在當國水内郡深田郷内是則不斷經衆之免
田也然按量彼免由於十二分充人別五段於十二
人畢敢不可違失矣次或讓所職或有闕分之時設
有讓得之證文有競望之仁且依衆議補器量不可
任相傳不可憚有緣是故吹噓之初撰定其器補職
之後不急其役但器量者不論有智高才黨不退精
勤矣次守過去帳每彼忌日役可奉勤行一時念佛
三昧仍諸衆守此等趣專調誠心不可懈怠之狀如
件

弘長三年三月十七日

沙彌蓮性在判

十八日 戊戌天晴 亥時名越邊燒亡山王堂在

其中失火云

廿一日 癸丑天晴 入夜雨降今日東御方里亭

有造作沙汰對馬前司氏信為惣奉行

四月大

一日 庚戌 二所御參詣供奉人事以先度進奉

散狀被催之云

三日 壬子 後藤壹岐前司二所供奉申障云

七日 丙辰天晴 入夜窻堂邊騷動但則靜謐是

群盜十余人隱居地藏堂之間夜行輩等行向其庭

生虜故也

十四日 癸亥 二所御參詣供奉人之中申子細

之輩事有其沙汰所謂 相摸左近大夫將監申

相州服暇之間非無觸穢之憚歟此上供奉如何

出羽八郎左衛門尉申

子細同前

近江三郎左衛門尉申

依御點進奉之上可令供奉之條雖勿論不諧

垂翅之間打梨定有憚歟者

以上執小侍註進武藤少卿景頼披露之處被聞食

訖者相州左親衛并出羽八郎左衛門尉等者有恩

許近江三郎左衛門尉者可令供奉者又後藤壹岐

前司相搆可令供奉之由云

十六日 乙丑天晴 河野四郎通行子息九郎經通入小侍番帳云和泉前司傳仰於小侍云東御方小町宿所上棟也但假棟云

廿一日 庚午天晴 將軍家二所御精進始御濱出為浴潮御也為御水干御騎馬也月卿雲容又著水干其外供奉人等立為帽子直垂還御之時皆著淨衣行列 御駕有步行御共

土御門大納言 近衛中將公敦朝臣
越前々司 民部權大輔
遠江右馬助 武藏式部大夫
越後四郎 駿河五郎

畠山上野三郎

佐々木壹岐前司

中務權少輔 女醫博士長宣朝臣 武藏守

平田左衛門尉 陰陽少名晴弘 相摸四郎

兩人後騎等相列如雲霞

廿三日 壬申天晴 御濱出如一昨是中御潮也
廿四日 癸酉 被點筑前入道宿所是自來四月一日為御祈大阿闍梨松殿僧正居所也
廿六日 乙亥 雨降將軍家二所御進發 騎馬

土御門大納言 近衛中將公敦朝臣
武藏守長時 相摸四郎宗政

越前之司時廣

同四郎政房

武藏式部大夫朝房

駿河五郎通時

武藤少卿景賴

木工權頭親家

畠山上野三郎國民

女醫博士長宣朝臣

遠江右馬助清時

民部權大輔時隆

越後四郎顯時

中務權少輔重教

佐々木壹岐前司泰經

後藤壹岐前司基政

美作左衛門藏人宗教

陰陽少名晴弘

步行

伊豫四郎左衛門尉景家

上野三郎左衛門尉

近江三郎左衛門尉

土肥四郎左衛門尉

隱岐四郎左衛門尉

周防七郎定賢

是立左衛門五郎遠時

内藤肥後六郎左衛門尉

小河木工權頭時仲

平賀三郎左衛門尉

小河左近將監

五月小

一日 庚辰天晴 將軍家自一所還御而今日鎌

倉御所自濱部崎當太白方可有御憚歎之由雖有

其沙汰猶還御

九日 戊子天晴 掃部助範元自京都歸家達密

奏之望云祖父太監物宣賢朝臣年來於事雖不出

望八十四歲之令見孫子當道之堪能為令繼家業

頻以內舉云當時人數繁多雖無其闕宗明朝臣之

流無人之條不使之由殊有其沙汰被宣下云載人

右衛門權佐經業為奉行云

十七日 丙申天晴 鷺集于左典廐御亭頃之指

求福寺山飛去被卜筮之處文元晴茂晴宗泰房賴

房等為口舌托之由占申受武田七郎次郎追彼鷺

射殺之持衆入夜依鷺恠彼行泰山府君百怪白鷺

等祭云

十九日 戊戌天晴 寅剋地震

廿九日 戊申 自來月一日御祈大阿闍梨松殿

法印休所事今度可為前尾州亭之處先日失火之

間被黜肥前四郎左衛門尉宅云

六月大

二日 庚戌天晴 東御方小町亭柱立去四月十

六日假棟今日上梁棟也又壹岐前司基政丹波守

賴景為在京上洛

十三日 辛酉 駿河六郎率相州左典廐等御輕

服也

十七日 乙丑陰 自昨日冷氣如秋天諸人纏綿

衣

廿三日 辛未 將軍家御上洛事有其沙汰被充

課役於諸國御教書文章一同也西海事者被仰遣

六波羅御教書云

御上洛間百姓等所役事段別百文五町別官賦

一疋夫二人可充行至此外不可成

民之煩但有逃散之輩者相觸在所可令勤其役

之狀依仰執達如件

弘長三年六月廿三日

武藏守 相摸守

陸奥左近大夫將監殿

廿五日 癸酉天晴 巳刻將軍家百首御詠被終
篇昨日未刻被始之則於御前清書掃部助範元候
之

廿六日 甲戌 來八月放生會御寮宮供奉惣人
數記為申下御點自小侍所被付和泉前司行方云
越中判官頼業被載此中之處稱病病申歸國之暇
今日於御所有帝範御談義右京權大夫茂範朝
臣三河前司教隆等候之又近衛中將公敦朝臣越

前々司時廣衆候云

廿八日 丙子 放生會御寮宮供奉人散狀有御
點左點布衣右隨兵左點端者直垂著云被下小侍
之間光泰實俊等廻之云

廿九日 丁丑天晴 小町御亭門上假棟
卅日 戊寅天晴 去廿五日御詠右大辨入道於
御前拜見之奉合點而勝于去年一日百首御歌之
由點者雖申是不通賢慮去年御詠猶宜之由被思
食云

七月小

五日 癸未天晴 將軍家今年中御詠歌數卷之
中抄出三百六十首致清書是為合點可被遣入道

民部卿為家卿今日依和泉前司行方孫子率去事

縫殿頭師連可奉行御所中雜事云

十日 戊子 小雨洒被立御所門棟門今日於前

濱被行風伯祭前大監物宣賢朝臣奉社之

十三日 辛卯 東御方小町新造亭移徒云今日

供奉人條々有其沙汰其中越中判官時業所勞申

是非指煩然而先自申暇之時不知食其實雖有恩

許常伺候之上者故障不可然之由有沙汰被相催

之趣已歸國云早可遣御教書之由云

此外人之布衣

足立三郎左衛門尉在一國

隨兵

足利上総三郎所勞服藥

三浦介

阿波四郎左衛門尉

城四郎左衛門尉

隱岐四郎兵衛尉

常陸修理亮

淡路四郎左衛門尉矢

風早大郎左衛門尉

已上八人申所勞之由

駿河五郎服

遠江十郎左衛門尉同

至于八月十五日為重服之由申

小田左衛門尉

造鹿嶋社惣奉行也雖供奉有限就余社事奔

勞似緩彼神事可為何様哉之由也

阿曾沼小次郎

落馬以後進退未合期以子息五郎令勤仕事

如何之由申

伯耆四郎左衛門尉

所勞雖治也。以子息五郎清氏。令勤仕。如何之由申

江戸七郎太郎

老與病計會。於今者著甲難叶進退之由申

足立太郎左衛門尉

御上洛供奉京都大番兩役之間。一事有恩許者。早可參勤之由申

直垂著

佐々木對馬太郎左衛門尉

同臺岐三郎左衛門尉 平賀三郎左衛門尉

已上三人有憚由申

佐々木對馬四郎

遠江五郎左衛門尉

依勞加灸之上。鹿食之由申

出羽七郎左衛門尉

大須賀六郎左衛門尉

信濃判官次郎左衛門尉

勞鹿食

以上三人鹿食之由申

鎌田三郎左衛門尉

勤仕大番訖。近曾歸參之間。難治之由申

官人

佐渡大夫判官

當時所勞若得少減者可推參之由申

信濃判官 服職

十六日 申午陰 右大辨入道真觀歸洛相州以
下諸人有餞送之儀云

十七日 乙未陰 日蝕不正現司天宿曜道等有
相論云

十八日 丙申天晴 將軍家帝範御讀合訖

廿日 戊戌 越中判官放生會供奉事依被遣御
教書獻頌狀請文云

廿三日 庚子天晴 將軍家五百首御詠歌付前
右兵衛督教定卿為合點被遣入道民部卿之許範
元清書之

廿七月 甲辰 放生會隨兵今十人可催加之由
被仰下云

北九月 丁未 雨降將軍家御歌自建長五年至
正嘉元年分被修撰號之初心愚草云

八月大 一日 戊申天晴 於御所被下五首和歌題於人
入二條少將雅有朝臣奉行之

四日 辛亥 放生會供奉人中鹿食憚之由申
輩事違犯嚴制之條不可然之旨殊被仰下之處有
各陳謝所謂

近江五郎左衛門尉
鹿食林制事未兼及之上為治所勞食服之由
申

大須賀六郎左衛門尉

所勞不快之間。鹿食可然由依醫師申忍忘御制事畢之由云

信濃次郎左衛門尉

去月上旬之比於或會合之取違于他物誤食鹿之由申

六日 癸丑 雨降將軍家令勸七首歌於人々御

是素遣法印率去之後有御夢想之告黃泉有其苦歎之由依被思食驚為被迴滅罪之謀以彼懷紙裡可被書寫經典云御詠被用左兵衛尉行長名字亦於廣御所有巨範御讀合彈正少弼越前々司掃部助範元等候御前

七日 甲寅天晴 於御所有五十首歌合衆議判

云云

八日 乙卯 放生會供奉人等事條々有其沙汰隨兵先被進奉之中河越次郎經重申障又後日重被觸仰之中佐渡太郎左衛門尉鹿食由申此外有子細于催促入々

尾張前司

秋田城介

各申所勞之由

陸奥左近大夫將監

伊勢次郎左衛門尉

各申有憚之由

常陸次郎左衛門尉

宮内權太輔

依所勞不快賜鹿食暇之由申

足立三郎左衛門尉

佐々木壹岐前司

賜身暇上洛之由申

新田參河前司

上野前司

同六郎左衛門尉

筑前三郎左衛門尉

小野寺四郎左衛門尉

伊豆太郎左衛門尉

和泉六郎左衛門尉

周防四郎左衛門尉

已上十六人 在國

有其沙汰被仰出條々事

布衣

小山出羽前司

石見前司

長門前司

和泉三郎左衛門尉

田中左衛門尉

肥後次郎左衛門尉

鎌田圖書左衛門尉

鎌田次郎左衛門尉

秋田城介

於所勞者初被廻散狀之比事與當出仕之上者早可催歟

鎌田圖書左衛門尉

同次郎左衛門尉

既自京都下向云早可催加者

隨兵

阿曾沼小次郎

自身故障令子息勤任之條何事有哉

上野太郎左衛門尉

輕服云何事字可相尋者

直垂著

鎌田三郎左衛門尉

先度故障之趣者自京都下向之間難治云申
狀之趣太自由也早重可相催者

隱岐四郎兵衛尉

先度加隨兵之處故障云書入直垂著散狀猶
可相催候

信濃次郎左衛門尉

先度故障畢可催具隨兵者

對馬四郎

故障何事畢重可催加者

追相催輩事

隨兵

城六郎兵衛尉

加藤左衛門尉

各進奉

下野四郎

各所勞之由載請文言歟

小野寺新左衛門尉

稱在遠江國自畠守返上御教書

直垂著

薩摩左衛門尉

善太右衛門尉

出羽十郎

山内三郎左衛門尉

萩原右衛門尉

長稚樂左衛門尉

以上六人進奉

大須賀五郎左衛門尉

所勞之由申

九日 丙辰天晴

御歌合衆議判訖有御連歌今

日左近大夫將監義政朝臣移徙于名越亭亦將軍
家御上洛車有其沙汰來十月三日御進發必然之
間路次供奉人已下事被定之其託縫殿頭師連持
衆御所召範元於御前被清書是為被進京都也
隨兵

相摸三即時輔

武藏前司子息一人

越前之司時廣

中務權大輔教時

左近大夫將監時村

越後四郎顯時

左近大夫將監公時

右馬助清時

足利上総三郎滿氏

上野介廣經

梶原太郎左衛門尉景經

對馬前司氏信

伊豆太郎左衛門尉實保

薩摩七郎左衛門尉祐能

周防五郎左衛門尉忠景

常陸左衛門尉行清

風早太郎左衛門尉康常

三浦介賴盛

小田左衛門尉時知

大多和左衛門尉義清

色部右衛門尉

加地七郎左衛門尉氏經

和泉三郎左衛門尉行章

遠江三郎左衛門尉泰盛

伊勢次郎左衛門尉行經

出羽彌藤次左衛門尉賴平

遠江十郎左衛門尉賴連

完戶壹岐次郎左衛門尉家氏

武田五郎三郎政直 阿曾沼小次郎光經

足立太郎左衛門尉直元

同三郎右衛門尉元氏 河越次郎經重

長次郎右衛門尉義連 狩野新左衛門尉

加賀前司行頼 加藤左衛門尉景經

下野四郎左衛門尉景經 海上彌次郎胤景

武右三郎左衛門尉朝胤

土肥四郎左衛門尉實經

淡路又四郎左衛門尉宗泰

隱岐四郎兵衛尉行長 常陸修理亮

進三郎左衛門尉宗長

佐々木壹岐三郎左衛門尉頼經

善太郎左衛門尉康定

小野寺四郎左衛門尉通時

出羽入道子息一人

和泉六郎左衛門尉景村

同七郎左衛門尉景經

一宮次郎左衛門尉康有

出羽三郎右衛門尉 肥後新左衛門尉景茂

相馬孫五郎左衛門尉胤村

田中右衛門尉知繼 長江四郎左衛門尉

石見次郎左衛門尉 出羽前司子息一人

長門三郎左衛門尉朝景

式部太郎左衛門尉光政

中條出羽四郎左衛門尉

善五郎左衛門尉康家

信濃次郎左衛門尉行宗

周防四郎左衛門尉泰朝

平賀三郎左衛門尉惟忠

小野寺次郎左衛門尉

内藤肥後六郎左衛門尉

内藤豊後三郎左衛門尉

肥後四郎左衛門尉行定

小笠原六郎子息一人

狩野四郎左衛門尉景茂

筑後四郎左衛門尉景家

武藤左衛門尉頼泰

武田六郎子息一人

土屋新三郎左衛門尉

長江七郎

速山六郎

氏家左衛門尉

善太左衛門尉

阿波入道子息一人

是立藤内左衛門三郎

天野肥後三郎左衛門尉

完戸壹岐左衛門太郎

近江三郎左衛門尉頼重

伊賀次郎左衛門尉久房

平左衛門入道子息一人

可著水干入

相州

武藏前司朝直

越後守實時

彈正少弼業時

長門前司時朝

武州

尾張前司時章

足利大夫判官家氏

佐々木壹岐前司泰經

武藤少卿景頼

佐渡大夫判官基隆

越中判官時葉

信濃判官時清

和泉前司行方

御路次間方々奉行人事

一 御出奉行

和泉前司行方

武藤少卿景頼

御物具

對馬前司氏信

武藤少卿

土肥四郎左衛門尉實經

御中持

木工權頭親家

進三郎左衛門尉宗長

長次郎左衛門尉義連

御宿事

和泉前司行方

備中守行有

式部太郎左衛門尉光政

御麩

薩摩七郎左衛門祐能

御笠

加藤左衛門尉景經 待野四郎左衛門尉景茂

御床子御敷皮

信濃次郎左衛門尉行經

掃部所

伊豆太郎左衛門尉實保

護持僧

醫陰道

已上兩條和泉前司

進物所

壹岐三郎左衛門尉頼經

釜殿

梶原太郎左衛門尉景經

砂金并紫染衣

和泉前司 式部太郎左衛門尉光政

紺染衣

武藤少卿 伊勢次郎左衛門尉行經

格勤侍

小野寺左近大夫入道光連

御中間

信濃判官時清

御力者

佐渡大夫判官基隆

朝夕 雜色

小侍

小舎人

侍所

國雜色

加賀前司行頼

御乘替事

長門前司時朝 越中判官時業

小野寺四郎左衛門尉通時

和泉六郎左衛門尉景村

善五郎左衛門尉康家武石三郎左衛門尉朝胤

阿曾沼小次郎光經

十日 丁巳 御上洛間進物所以下用途事今日

有其沙汰來十月御上洛以前可進濟京都之旨彼

仰遣畿内西國等云其御教書被下守護人等云

十一日 戊午雨降 申越以後屬霽於兩御所御

連歌五十句 掃部助範元五句 為執筆

前右兵衛督教定 五句 中務權少輔重教朝臣句

侍從基長 三句 遠江前司時直 五句

右馬權助清時 四句 河内前司親行 七句

武藏五郎時忠 四句 加賀八道親賴 一句

左衛門少尉行佐二句

左衛門尉行俊一句

左衛門尉忠景 四句

御句八句云

十二日 己未 小雨常洒去夜御連歌大夫判官

基隆奉仰合點云

十三日 庚申 放生會供奉人進奉散狀被取整

沙汰訖其中依有故障重被催促之輩或進奉或猶

申子細於故障者以前以後皆恩許云所謂

隨兵

信濃次郎左衛門尉

先度為直垂人數之時辭退今隨兵催促進奉云

上野太郎左衛門尉

祖母他東日敷不幾之由申

直垂著

對馬四郎

故障同前

官人

足利大夫判官進奉

信濃判官輕服數日已走過進奉

越中判官

先度尔獻領狀請文猶申所勞之由

十四日

辛酉

自朝天陰雨降雷鳴數聲則南風

烈雨脚彌甚午尅大風拔樹民屋大略無全所御所

西侍顛倒棟梁桁等吹拔之亦由比濱著岸船數十

艘破損漂沒今夕御息所供奉人事進奉惣人數之

中被下御點云是放生會依可有御參宮也子刻前

大宰少貳正五位下藤原朝臣為佐法師法名蓮祐率八年

十五日壬戌晴鶴置放生會將軍家御出如例

相州武州左典廐等被候迴廊又彈正少弼業時相

摸三即時輔越後四郎賴時等衆御棧敷云先中御

所御出

供奉人

備中次郎兵衛尉行藤

佐々木壹岐四郎左衛門尉長經

城中八郎秀頼大泉九郎長氏

萩原右衛門尉定仲長雅樂左衛門三郎政連

已上六人著直垂帶劔候御車左右

御後十人 布衣下拵

越前々司時廣

刑部少輔時基

中務權少輔重教

日向前司祐泰

縫殿頭師連

遠江四郎政房

加賀前司行頼

長次右衛門尉義連

佐々木孫四郎左衛門尉泰信

加地七郎右衛門尉氏經

次將軍家御出供奉人

先陣隨兵十人

臺岐三郎左衛門尉頼經

加藤左衛門尉景經

筑前四郎左衛門尉行佐

武藤左衛門尉頼泰

伊東八郎左尉門尉祐光

伊勢次郎左衛門尉行經

出羽三郎左衛門尉行資

武藤五郎宣時

城六郎兵衛尉顯盛

相摸七郎宗頼

陸奥十郎忠時

次諸大夫

次殿上人

次公卿

次御車

越中次郎左衛門尉長食

土肥四郎左衛門尉實經

隱岐四郎兵衛尉行長

武石新左衛門尉長翁

出羽十郎行朝

近江三郎左衛門尉頼重

一宮次郎左衛門尉康有

山田三郎左衛門尉通康

善太郎右衛門尉康定 鎌田三郎右衛門尉義長

薩摩左衛門四郎祐家 伊東六郎左衛門三郎

以上十二人著直垂帶劔候御車左右

次御後十五人 布衣下搖

彈正少貳業時

相摸四郎宗政

相摸左近大夫將監時村

遠江右馬助清時

相摸三郎時輔

越後四郎顯時

木工權頭親家

和泉前司行方

越中前司頼業

對馬前司氏信

備中守行有

周防五郎左衛門尉忠景

鎌田次郎左衛門尉行俊 進三郎左衛門尉宗長
善五郎左衛門尉康家

次後陣隨兵十人

佐介越後四郎時治

畠山上野三郎國氏

大須賀新左衛門尉朝氏

越中五郎左衛門尉泰親

平賀三郎左衛門尉惟時

伯耆左衛門五郎清氏

佐之木對馬太郎左衛門尉頼氏

信濃判官次郎左衛門尉行宗

遠山孫太郎左衛門尉景長

長門左衛門八郎頼秀

官人

佐々木大夫判官家氏 信濃判官時清

十六日 癸亥天膚快靈御祭宮同昨日

取競馬祿人々

越前々司時廣 相摸左近將監時村

相摸三郎時輔 刑部少輔時基

遠江右馬助清時 同四郎政房

越後四郎頼時

廿五日 壬申天晴 御上洛事依大風諸國稼穀

損亡之間為休弊民煩所被延引也仍今日以其旨

被仰遣六波羅御教書二通被遣之一通者可相觸

京畿御家人事一通左親衛分國置可存知事也其

狀云

御上洛事依大風御延引之由所被仰下也其間

雖可被進御使且其旨可被相觸御家人等也依

御執達如件

弘長三年八月廿五日

武藏守 相摸守

陸奥左近大夫將監殿

來十月御上洛所有御延引也且於御京上役辨濟

所之者可令糾返于百姓也早以此趣可被下知攝

津若狹國中_ニ之狀依仰執達如件

弘長三年八月廿五日

武藏守 相摸守

陸奥左近大夫將監殿

今日春日部左衛門三郎泰實被召放美濃國指深庄地頭職是當庄沙汰人地頭有非法之由就訴申六波羅雖下召文泰實不應之仍註進其趣之間及此儀即所被仰遣陸奥左近大夫將監許也又法印源權律師覺乘等於相州禪室御亭令信讀大般若經依有御病惱也亥尅廿繩有火事北斗堂邊民居多以災云

廿六日

癸酉陰

依去

十四日大風諸國損亡百姓愁歎之間以撫民之儀將軍家御上浴延引之間以遠江十郎左衛門尉頼連為御使被申此由於仙

洞云

廿七日

甲戌天晴

申尅以後風雨入夜大風由比浦船舶沒彼死人寄河彼是不可勝計又鎮西乃貢運送船六十一艘於伊豆海同時漂濤云

九月大

三日

庚辰天晴

午尅從五位上行刑部權少輔大江朝臣政茂率

十日

丁亥

切錢事有其沙汰近年多以出來之由有其聞自今以後者用切錢事可停止之存此旨

普可令下知之由被仰奉典廐等云其狀云

切錢事

右近年多出來之由有其聞於自今以後者用切錢事可停止之存此旨普可令下知之狀依仰執達如

件

弘長三年九月十日

武藏守
相摸守

加賀前司殿

十二日 巳丑

終夜甚雨。戌刻雷鳴。武藏大路霹

靂。蹴裂率都婆其上。三尺余。為雷火燒。蹴裂之響聲

人屋聞者甚多。今日遠江十郎左衛門尉自京都

歸衆

十三日 庚寅天晴

寅刻以後。將軍家御惱。今朝

諸人舉登山。而見去夜雷火燒之率都婆。非時雷鳴

不輕其慎之由。陰陽道等進勘文。

十四日 辛卯天晴

依御惱。晴宗於御所。勤仕。泰

山府君祭

初度勤星降臨。効驗指焉也。

廿六日

癸卯晴

入道陸奥五郎平實泰。法名率

年五十六

十月大

一日 戊申晴

大藏權大輔泰房於御所南庭行

天地災變祭。是去月十一日。大雷御祈禱也。

八日 乙卯

和泉前司行方此間湯治之。颯俄以

煩中風所勞云

十日 丁巳

被行評定。六波羅檢斷等事。有其沙

汰。令召出彼。俎候人佐治入道。為使節於當座被仰

云。強盜人事。無地頭權門領以下所々。自守護所隨

相觸。可被召出之。不然者。可被追放。彼所無其儀者。

可補地頭之由。兼可被申本所。次自地頭補任所。不被召出。強盜人者可被改易。彼地頭職之旨。相觸之後。可被註申之。今日晚景正五位下行。石見守大江朝臣能行卒。

十四日 辛酉 今日評定出羽前司入道之空始出仕。此一兩年依病龍居。

十七日 甲子 明年正月御的始。射事有沙汰。可參勤之由。被卜左典廐一人。御奉書。越後守重服故也。

廿五日 壬申晴 今夜中御所出御于武州亭。御外戚太政法印澄圓入滅。依御輕服也。彼上經者光明峯寺。禪閣御息。

廿六日 癸酉 雨降。故奥州禪門第三年佛事於

極樂寺被修之。以宗觀房為導師。

廿七日 甲戌天晴 曉雨降。今日貢馬御覽。

廿八日 乙亥天晴 將軍家五百首御詠。民部卿入道融覺加點返上。則副一卷狀。六義與旨。猶可被疑御沈思之由。申條々諷諫云。

十一月小

二日 己卯天晴 左衛門少尉清原真人滿定頓死。年六十九。

八日 乙酉 依相州禪室御勞事。被加御祈禱等。先今日中造立等身千手菩薩之像。有供養之儀。導師松殿僧正良基也。即以伴僧十二人。相共被修畫。

夜不斷千手陀羅尼僧正斷五穀伴僧有一日三箇
度行水云次尊家法印於園殿被修廷命護摩次陸
奧左邊將監義政一日之內造立等身藥師像請尊
家法印為導師被遂供養云又尊海法印帶等身藥
師畫像七箇日為令衆籠于三嶋社今曉進發修三
時護摩可信讀大般若經云

九日 丙戌 加賀前司行賴所勞危急之間政所
執事筑前三郎左衛門尉行實可致沙汰之由被仰
付云

十日 丁亥 前加賀守從五位下藤原朝臣行賴
率年卅四

十三日 庚寅 最明寺禪室御不例已及危急之

間尊家法印修法華護摩松殿僧正於山内亭斷五
穀修行法云

十五日 壬辰 依禪室御祈松殿僧正今日始行
不動護摩又有三時護身云

十六日 癸巳晴 午刻御息所御著帶御驗者大
納言僧正良基香染法服伴僧醫師玄番頭丹波長

世朝臣布御陰陽權助政茂朝臣東宿曜師大夫法
眼睛尊等也又尊家參上云太宰少貳景賴奉行之

戊尅地震
十七日 甲午霽 被圖繪供養放光佛是依尊家
法印申行至御產之時連日被奉稱養云

十九日 丙申 相州禪室御病痢緯已及危急初

有渡御于最明寺北亭心閑可令臨終給之由思食
立仰尾藤太法名宿屋左衛門尉法名宿屋可禁制群衆
人之由云

北日 丁酉 早且渡御北殿偏及御終焉一念昨

日含嚴命之兩人固守其旨制禁人之群衆之間頗

寂寞為御病者六七許輩程候之外無人所謂

武田五郎三郎

南部次郎

長崎次郎左衛門尉

工藤三郎右衛門尉

尾藤太

宿屋左衛門尉

安東左衛門尉

等也

北二日 巳亥霽 未刻小町燒亡南風頻吹甚烟

掩御所仍御車二領引立南庭諸御出之儀爰至前

武州亭前火止戌刻入道正五位下行相摸守平朝

臣時賴御法名道崇於最明寺北亭卒去御臨終之

儀著衣袈裟上繩床令座禪給聊無動搖之氣頌云

葉鏡高懸三十七年一搥打碎大道坦然

弘長三年十一月廿二日道崇珍重云

平生之間以武略而輔君施仁儀而撫民然間達天

意協人望終焉之刻又手結印口唱頌而現即身成

佛瑞相本自權化再來也誰論之哉道俗貴賤成群

奉拜之尾張前司時章丹後守賴章太宰權少貳景

賴隱岐守行氏城四郎左衛門尉時盛等依哀傷難

休各除鬢髮其外御家人等出家不違甄錄皆以被

止出仕亦武藏前司朝直朝臣落飾之處武州以彈

正少弼。頻被加禁。過之間。空素意云。

廿三日 庚子天晴 酉。尅相州禪室葬禮也。今日

御息所御產。御祈以下事。被施行之奉行。太宰少貳

景賴。出家之間。縫殿頭師連。奉之亦御驗者。大納言

僧正。護持僧。大貳法印。醫師。長世。朝臣等。至去廿二

日。晚。最明寺禪室。病惱之間。或致祈精。或迴醫術。仍

御產之間。事各辭申之云。

廿四日 辛丑天晴 將軍家有哀傷十首。御諫。是

依最明寺禪室御事也。

廿五日 壬寅 寅。尅月犯房第三星。相。去。四。房。主

左右馬寮也。左典廐。殊可有御慎之由。司天輩申之。

十二月大

九日 乙卯天霽 入夜右少辨經任朝臣。為 仙

洞御使。下著。依最明寺禪室事也。

十日 丙辰天霽 源亞相對面 勅使又秋田城

介泰盛同謁申云。今日被下御教書於諸國守護人。

是依相州禪室御事。可遂出家之旨。兼以被觸仰之

處。有違犯輩之由。令風聞故也。

依相摸入道逝去御事。家人等不可令出家之由。

先日被仰下之處。皆御制。多以出家云。其國御家

人中。可被注出家輩之狀。依仰執達如件。

弘長三年十二月十日

某殿

寅刻。若官大路燒亡。始自咒師勾當。至于大學。辻

子火芳延其中間人家皆以災太宰少貳景頼入道宅在其中云

十一日 丁巳 相州武州等被謁申 勅使今夕

被始行御祈之間為大阿闍梨安祥寺僧正休所被

點和泉前司行方家也師連奉行之

十三日 巳未天晴 今曉右少辨經任朝臣歸洛在鎌倉僅四箇日云

十六日 壬戌天晴 六波羅陸奥左近大夫將監

時茂朝臣歸洛最明寺殿御事衆向而不可緩彼物沙汰由被仰出候間揚鞭云

十七日 癸亥晴 戌刻荏柄社前失火余炎至塔

辻宮內權大輔時秀家被定御產所之處同以不免

災

廿四日 庚午天晴 入夜雨降今日評定衆等衆

相州亭御產所并御方違等事有其沙汰召陰陽師

等被尋面々異見爰渡御々產所日可為來廿四日

之由兼被定之而今晴茂朝臣申云彼日沒日也可

有憚云葉昌申云建長六年四月廿四日丙寅沒日也大

宮院入御々產所無憚云且勘申件例之間相論無

為落居次御產所官內權大輔家燒失之間被點公

時義政兩大夫將監亭之處晴茂申云當閉坏八座

方有其憚云爰三河前司教隆難申云凡大臣家以

下古勘文不入此事云次御方違被用廿九日而葉

昌申云往亡日也可有其憚云葉昌又申云非常途

御方違為産所之條如何云仍三州令問答晴茂朝臣之處雖申不可有憚之由相州猶許容可憚之意見給云

廿八日 甲戌天晴 御息所為御方違入御左近

大夫將監公時朝臣名越亭是依被定御産所也

廿九日 乙亥天晴 辰刻御息所自名越還御午

尅六波羅大夫將監室著姓帶若官僧正加持之給云

新刊吾妻鏡卷第五十一

新刊吾妻鏡卷第五十二

文永二年乙丑

正月大

一日 辛未 日蝕也然而自去夜雨降蝕不見仍

不及囊御所被行坑飯左典磨但垂御簾無出御

上御門大納言依惟御劔役越後守實時 御調度

越前之司御行騰杵秋田城介泰盛

一御馬 陸奥十郎忠時 工藤次郎左衛門尉

二御馬 越後四郎顯時 武藤三郎兵衛尉

三御馬 城六郎兵衛尉顯盛 同九郎長景

四御馬 筑前四郎左衛門尉行佐

同五郎左衛門尉行重

五御馬 相摸七郎宗頼 工藤三郎左衛門尉

二日 壬申天晴 埃飯相州御前大納言御

劍中務權太輔教時御調度左近大夫將監公時御

行騰備中守行有

一御馬 越後四郎顯時 鶺沼次郎兵衛尉國景

二御馬 式部太郎左衛門尉光政 隼入三郎左衛門尉光範

三御馬 城六郎兵衛尉顯盛 同九郎長景

四御馬 出羽七郎左衛門尉 備中次郎左衛門尉行勝

五御馬 越後六郎實政 戶田兵衛尉茂平

三日 癸酉天晴 枕飯越後入道御簾前黃門御

劍越前々司時廣御調度右馬助時親御行騰相摸

四郎宗房御馬五疋未尅將軍家御行始左典廐御

亭御引出物如例御劍左近大夫將監茂政砂金左

近大夫將監時村羽左近大夫將監公時

一御馬 相摸四郎宗政 武藤左衛門尉頼泰

二御馬 三浦介頼盛 同七郎

五日 乙亥霽 亥刻六波羅飛脚下著依山門園

城寺騷動事也

六日 丙子天晴陰 依山門園城寺騷動事去夜

六波羅使者持衆經任朝臣奉書并註進狀御使伊

勢入道行願去年在京書狀等可有披露而今年雖

評定始以前爲急事之間不及日次沙汰有今日評

評定始以前爲急事之間不及日次沙汰有今日評

評定始以前爲急事之間不及日次沙汰有今日評

評定始以前爲急事之間不及日次沙汰有今日評

評定始以前爲急事之間不及日次沙汰有今日評

定但人之不著布衣又無盃敵是非評定始之禮歟
近年無如此例云相州令出仕給尾張入道見西越
後守實時出羽入道之空秋田城介泰盛縫殿頭師
連太宰權少貳入道心蓮伊賀入道之園對馬前司
倫長勘解由判官康有等候其座佐藤民部次郎葉
連執筆事書等儀畢泰盛心蓮持衆之上覽之後召
使者於評議座被下御返事即時使令歸洛畢
七月 丁丑天晴 將軍家御衆鸛置八幡宮還御
之後有枕飯之儀 ○十二日 壬午天晴有弓始

射手

- 一番 二宮弥次郎時元 横地左衛門次郎師重
- 二番 波多野八郎朝義 早河六郎祐頼

三番 松置左衛門次郎時家
栢間左衛門次郎行泰

四番 小沼五郎兵衛尉孝幸 海野弥六泰信

五番 澁谷左衛門尉朝重 平嶋彌五郎助經

今日被行評定始去六日者臨時儀也仍就吉日故

被始之師連泰盛持衆事書云
十四日 甲申震 可有御所御鞠始之由依有其

催數輩衆上之處依風烈人々退出畢
十五日 乙酉天晴 午尅地震今日御鞠始將軍

家令立御衣御衣土御門大納言布衣二條三位教
定卿布衣同少將雅有朝臣布衣上中務權大輔教
時越前々同時廣右馬助清時木工權頭親家備中

守行有。武藤左衛門尉賴泰。加藤左衛門尉景經。錄
田次郎左衛門尉行俊。内記左衛門尉。同兵衛三郎
已上布衣。凡十六人也。及晚頭。被行椀飯。
廿日 庚寅 雷雨。電光耀天。降雹。動地也。
廿四日 甲午陰 今日本椀飯。馬數定。賜近習并醫
陰兩道之輩。

二月小

二日 壬寅天晴

御息所入御相州。為是依將軍

家二所御精進也。

三日 癸卯霽

將軍家二所御精進御濱出。土御

門大納言左典廐。越前之司。越後右馬助。以上供養
人數輩也。醫師施藥院使忠茂。陰陽道少允晴宗等。

被召具之

七日 丁未天晴

風靜。將軍家二所御進發供奉

人成牆者也。其中後陣隨兵一騎於中下馬。橋落馬
午。尅御息所。俄御惱。仍人之群衆之憂。無殊御事云。

九日 巳酉

丑尅。笠間前長門守從五位上藤原

朝臣時朝率。年六十一

十二日 壬子

終日雨降。戊尅。將軍家於二所御

逗留

十五日 乙丑

著到事。勘申。可書之由云。師連奉

結解之詞。不可然云。

三月大

一日 庚午

風雨甚。戊尅。雷鳴。

四日 癸酉天晴 今日於御所鞠御靈覽童舞是所被引移昨鶴置法會舞樂也先舞童等相分南北著座以西為土御門大納言花山院大納言等被候簾中云

出居 公卿

從二位 顯民卿

從三位 基輔卿

殿上人

一條中將能基

八條中將信通

八條兵衛佐盛長

六條少將顯名

唐橋少將具忠

六條侍從顯教

左

三臺

河州

太平樂

散主

陵主

太平樂 幸主

夜叉主

松若

禪王

瑠璃王

散手 乙主

陵主

松若

右 長保樂

林歌

柏梓

貴德

納蘇利

柏梓 萬歲

各齋 齋直 千手

乙鶴

金昆羅

竹王

貴德 萬歲

納蘇利 禪王

幸主

豆王

又右近將監中原光氏迴雪奏賀殿之間給祿物能基朝臣役之

五日 甲戌 鎌倉中被止散在町屋等被免九箇所又堀上家前大路造屋同被停止之且可相觸保之之旨今日可被伸付于地奉行人等小野澤左近大夫入道也

町御免所之事

一所大町。一所小町。一所魚町。一所穀町。
一所武藏大路下。一所須地賀江橋。一所大倉辻。
七日 丙子天晴 御所彼岸御懺法結願御布施
取公卿中門三位直衣殿上人九人或東帶諸大夫
二人信濃藏人部助也御息所自今日七箇日御參籠
鶴里入夜御出御輿女房東御方一條局尼卿局并
下齋三人供奉先之為縫殿頭師連奉行被遣指圖
於宮寺令攝御局等云別當僧正催六十余人匠終
不由之功以熱田三嶋御前橫廊四間為御局以西
二間御寢所并御念誦所以東二間為御出居以東
迴廊與橫廊之中間敷板為臺所以東廊北端為東
御方局以其次一間御湯殿又局後龍軒敷板為下

口并湯殿以白幕五帖曳迴廊北軒為面道云
九月 戊寅天晴 亥尅大地震今夜於鶴里若宮
寶前被行管絃論別當僧正讀式入講其後有御神
樂入長松若丸本拍子萬歲末拍子禪主和琴十手
筆策乙鶴大笛夜文王云云
十一日 庚辰天霽於鶴里上宮有法華經供養權
少僧都慈曉導師
十三日 壬午天晴 御息所御參籠之間御局以
下事致了寧沙汰之由召別當僧正有御感其上賜
南庭三砂金十兩銀劔等縫殿頭師連傳之云
廿二日 辛卯天晴 南風烈今日從五位下三善
朝臣康家年五十四

四月小

廿二日 辛酉天晴 將軍家依御夢想之告於御所南庭被行泰山府君祭主殿助業昌朝臣束帶奉仕之御都狀廣籬草之被下鞍馬一疋御劔一腰縮十疋縫殿頭師連為奉行。
廿五日 甲子 執柄良殿ニ可被上表之由云。

閏四月小

七日 乙亥天晴 遠江四郎平政房率
廿日 戊子 御所無入之由依有其聞先可註進當番不衆衆可被處罪科之旨左典厩今日被遣御使於小侍云。
廿五日 癸巳天晴 依殊御願於御所被始行五

大尊合行法若宮別當僧正奉仕之率伴僧十口云。

五月小

二日 己亥 去月廿二日關白實經一拜賀去十一日
六日 二條殿依被上表也。
三日 庚子天陰 日中五大尊合行法被結願今日為故武州禪門忌景於泉谷新造堂佛事道師若宮僧正隆辨。
五日 壬寅天晴 於御所被始行大般若讀經之

主十人。
僧各 權少僧都

權律師

兼伊 房譽 景辨

房盛 實雅

淨昭

賴辨

盛辨

兼辨

賢辨

辨盛

兼朝

信勝

房朝

辨譽

賴意

十日 丁未天晴

自夕終夜甚雨御息所御懷孕

之間今日被給御祈業昌朝臣奉仕天曹地府祭押

垂掃部助為御使

廿三日 庚申

高柳弥次郎轉盛與縫殿頭文元

就所領有相論事轉盛確執之余許申云文元亦為

陰陽師其子息等帶太刀等偏如武士早可為本道

威儀之由可被仰下云仍今自有評議彼子息大藏

少輔文親大炊助文幸等雖為陰陽師子孫相兼右

筆之上七條入道大納言家御時致幕府官仕或勒

宿直或為格子上下役武州前史禪室最明寺禪室

二代如此作法可令奉公之由被仰今更難改之但

於官途者不相兼本道以右筆役計致奉公之輩限

官位任雅意被任之條不可然蒙御免可任之旨被

仰出云文親者相兼本道文幸者右筆計也

六月大

三日 巳巳 日中夕立故秋田城介義景十三半

之佛事也於無量壽院自朔日至今日或十種供養

或一切經供養也而今迎正日供養多寶塔一基道

師若宮別當僧正隆辨布施被物十重太刀一南庭
五砂金卅兩錢百貫文伊勢入道行願武藤少卿入
道心蓮信濃判官入道行一以下數輩為結縁詣其
場說法最中降雨如車軸于時山上所構之聽聞所
屋顛倒諸人希有而逃去其中男女二人自山嶺落
路之地半死半生云。

十日 丙子 終日降雨甚龜谷并泉谷所之山崩
人馬多土石被狀死其中自土中被掘出者一兩輩
僅存命云

十一日 丁丑天晴 評定衆被新加所謂前越前
守平時廣中務權大輔平教時宮内權大輔大江時
秀又引付新加衆左近大夫將監平義政彈正少弼平

業時左近大夫將監平公時二番備中守藤原行有
前對馬守源氏左衛門尉藤原行實三番高氷右近
三郎執筆是壹岐五郎左衛門尉為忠辭退之替所
被召加也

十三日 己卯雨降 午刻屬晴今日為御息所御
産御祈於御所被供養放光佛導師尊家法印左近
大夫將監時村左近大夫將監顯時等取御布施又
被行七瀬御杖

廿三日 己丑 將軍家入御最明寺亭供奉人
騎馬

前大納言
越前々司

中御門少將
中務權大輔

遠江右馬助

尾張右近大夫將監

相摸四郎

縫殿頭

備中守

式部太郎左衛門尉

薩摩七郎左衛門尉

周防五郎左衛門尉

步行

武藏五郎宣時

美作左衛門藏人家教

隱岐次郎左衛門尉行景

彈正少弼

越後右近大夫將監

木工權頭

宮内權大輔

信濃大夫判官

常陸左衛門尉

和泉左衛門尉

城六郎兵衛尉

武藤左衛門尉頼泰

同兵衛藏久長教

同四郎兵衛尉行長

肥後四郎左衛門尉行定

甲斐三郎左衛門尉為成

出羽八郎左衛門尉行世

信濃次郎左衛門尉行宗

武石新左衛門尉長胤

筑前五郎左衛門尉行重

善太郎左衛門尉康定

鳴津周防七郎重賢

入彼亭寢殿即供三獻左京兆相州越後守實時秋田城介泰盛等被參候云

七月小

四日 庚子

未尅於山内御山庄侍二人起關亂

决離雄相互死畢依之鎌倉中騷動御家人等馳參
十日 丙午天晴 御息所入御之産所左近大夫
將監宗政朝臣亭

十六日 壬子天晴 及晚將軍家入御左京兆小
町亭供奉

源大納言

中務權太輔

越後左近大夫將監

義作左衛門藏人

式部太郎左衛門尉

城六郎兵衛尉

甲斐三郎左衛門尉

一條中將

彈正少弼

信濃大夫判官

同兵衛藏人

和泉左衛門尉

周防五郎左衛門尉

善太郎左衛門尉

伊東余一

薩摩左衛門四郎

加藤三郎

左京兆跪庭上被奉入出居御安座以前供御々鐘
至于供奉人前皆置希物而三献之未終之程秋田
城介泰盛送砂金百兩鞍馬一疋御所入御之由依
傳承稱引進之云又成尅亭主息女有嫁娶之儀被
渡于相摸左近大夫將監宗政亭於出居有御酒宴
姓公自常居所出立訖此間父朝臣遂不被起御前
之座大名用意時之義談也曉更臨邊御之期被進
御引出物云

十八日 甲寅天晴

前二河守正五位下清原真

人教隆率于時在京

廿三日 己未陰 將軍家入御山内御亭。

廿四日 庚申天晴 於山内許相撲并競馬等凡

遊宴被盡數晚頭還御左典廐被奉御贈物又供奉

人面之類之。

廿五日 辛酉 法印定親入滅。

廿八日 甲子 小雨降御産御祈被行千度被晴

茂 宜賢 葉昌 晴長 晴秀 晴憲 晴宗

泰房 職宗 親定 等候之陪膳右近大夫將監時

村 黃菊 紫菊 右馬助清時 織物將衣送十人 各布

格勤十人 各白 爲手長縫殿頭師連備中前司行有

式部太師左衛門尉 元政輕服替俄奉之等奉行。

八月六

五日 庚午陰 夕小雨降將軍家自馬場殿入御
之産所即還御

十三日 戊寅霽 故武州禪門長 同關佛事 被

修之又爲極樂寺奥州禪門後追福被書寫供養

五部大乘經是依左典廐御夢想一日内所被頓寫

開題也。

十五日 庚辰天晴 鶴置放生會將軍家無御出

又無御奉幣使一事以上官寺被遂行之是依御息

所御懷孕事也。

十六日 辛巳天晴 將軍家爲覽馬場儀密々入

御于相州御棧敷左近大夫將監顯時役御食中務

權大輔教時彈正少弼葉時候御輿寄其外十有余

輦供奉。今年相州御棧敷七箇間之外。人々棧敷。皆以傳之。將軍家無御出儀之上。依儉約也。流鏑馬第三番射。手二三的。不中。競馬勝負。宮寺可定。申之由。左京兆被計申之。依御憚。無御執行神宴之由也。同口取祿等事者。為諸大夫之役。相撲之祿者。神宮寺取之。講讀師等僧。布施各被送本坊云。戊刻。土御門大納言奉為御息所御平産被行御祈於由比濱。葉昌朝臣奉仕靈氣祭云云。

廿五日 庚寅陰 將軍家令煩御痢病御但無程御平減云云。

九月大

一日 丙申陰 日中小雨降。今日辰刻。御息所有。

御産氣群衆人々不知其數。被行御占。或指申申西。尅或可為亥子尅之由。申之。而頃之。無御産氣。殆常時云。仍諸人退出。縫殿頭師連。式部。太郎左衛門尉。光政等奉行此間事。光政輕服之間。行有奉之處。亦服暇出來。而光政輕服日數。馳過之間。如元所奉行也。

廿一日 丙辰 晚雨降。今日寅刻。有御産氣。辰尅。

姫宮誕生。御驗者。松殿僧正。安祥寺僧正。尊家法印。醫

師長。世朝臣。御枝。晴茂。束帶。宣賢。葉昌。晴長。

晴秀。晴宗。泰房。衣冠也。先陰陽師七人。自座上

次第賜列祿。白綾衣。次御驗者三人。御衣。御馬十疋。

侍子。人。著。立。之。鳥。次長世朝臣。於公卿御座之傍。給御

衣八條三位取之陰陽權助晴茂朝臣於同所給御衣左近大夫將監公時役之

十月小

二日 丙卯 筑前守從五位上藤原朝臣行善率年五十五

七日 壬申天晴 於御所有連歌御會三河阿關梨圖勇候執筆役

十四日 巳卯 又有御連歌 十八日 癸未天晴 右大辨入道 真觀 自京都衆

向兵部太輔範忠朝臣又下著依御產無為事也但内々各依勅撰集事云

十九日 甲申 於御所有御連歌御會若官別當

僧正相具百種懸物參上凡日來連々應召云

廿五日 庚寅 朝兩午尅屬晴今日最明寺禪室第三年御佛事於山内被脩之道隆禪師十一日

廿六日 辛卯天晴 貢馬御覽左京地相州以下

即騎之而引手等無左右放之馬騰及度々而合由

雖落重乘之打迴御前之間高騰廿余度近年無如此龍蹄云

十一月大

十三日 丁未天晴 京都御使兵部大輔範忠朝臣歸洛去比下向是被賀申御產無為事又勅撰事

云

十六日 庚戌明年正月御弓始射等被差定之

相摸左近大夫將監彈正少弼等被下連署奉書云

十七日 辛亥陰降沔霰常 今日御息所并若宮

姬宮自御產所相州親還御

十九日 癸丑 去八日僧事聞書到著若宮別當

僧正轉大僧正是依御祈賞也以其除書自御所被

遣官寺即被相副一首御詠云鎌田次郎左衛門尉

行俊為御使云

廿日 甲寅 信濃國善光寺事且為被鎮寺辻惡

黨且為警固被定置奉行人所謂和由石見入道佛

阿原宮内左衛門入道西蓮窟寺左衛門入道光阿

誣方部四郎左衛門入道定心等也而相交負外雜
務致不調沙汰之由訴訟出來之間今日及評議自
今以後可令停止彼奉行人等之旨被仰出且此子
細所被觸仰當國守護人陸奥孫四郎也

十二月大

五日 巳巳天霽 入夜於左京地亭有當座歌合

右大辨入道以下好士等群集云

十四日 戊寅霽 今曉彗星見東方爰掃部助範

元最前令衆御所客星出見之由申之次晴茂朝臣

彗星之由衆申其後國繼晴平晴成獻彗星勘文

十六日 庚辰天晴 將軍家出御于庇御所召

司天等數輩被尋變異事土御門大納言左近大夫

將監公時伊勢入道行願信濃判官入道行一以下
入之多以候箕子司天等任位次申之十三日陰雲
之由一同申之晴隆十四日曉有迹太白之至數返
雖窺見客星彗星不見之由申之範元申晴耀之由
旨而猶伺見可申子細之趣被仰下太宰權少貳入
道心蓮奉行之

十八日 壬午天晴 卯刻彗星出見長一尺余今

日於小待所明年正月御的始射手以下事等有其
沙汰射手有故障等不可有免許由及群儀云相摸
左近大夫將監彈正少弼等奉行之

廿七日 辛卯霽 今夕彗星見西方有室宿苦氣

二尺余色白

文永三年 丙寅

正月六

一日 乙未天霽 風靜堦飯相州御御簾前大納

言御劔越前々司時廣御調度左馬助清時 御行

騰秋田城介泰盛御馬五疋昏黒彗星見西辟八度

二日 丙申天晴 堦飯左京兆御簾前大納言

御劔左近大夫將監公時 御調度 左近大夫將

監顯時 御行騰備中守行有御馬五疋堦飯以後

將軍家御行始相州御亭御引出物如例御劔左近

大夫將監時村 砂金 左近大夫將監公時 羽

左近大夫將監顯時 御馬二疋

三日 丁酉天晴堦飯雜糞孫四郎御簾前大納言

御劔右馬助清時。御調度。刑部少輔時基。御行騰。對馬前司氏信。御馬五疋。

七日 辛丑天晴。佐々自法印權大僧都守海入滅。年六十二。

十一日 乙巳 自去夜雪降。午尅屬霽。今日有御弓始射手。

一番 伊東刑部左衛門尉 澁谷新左衛門尉

二番 横地左衛門次郎 小沼五郎兵衛尉

三番 早河次郎太郎 栢間左衛門次郎

四番 海野弥六 堤又四郎

五番 山城三郎左衛門尉 平嶋弥五郎

今朝相州被衆鷲里八幡宮。

十二日 丙午天晴。變慧御祈。金剛童子法。大僧正

隆辨如法尊星王法。安祥寺僧正。天地災變祭業昌

御使伊達藏人大夫。屬星祭國繼御使池伊賀前司

十三日 丁未霽。未尅兩降。酉尅屬晴。依將軍家

蚊觸事。今日御鞠始延引。戌尅被行。慧變御祈。陰陽

少允晴家於御所西庭。奉仕如法泰山府君祭雜事。

左近大夫將監宗政朝臣沙汰所被奉獻鞍馬一疋。

裸馬一疋銀劔一腰也。此外手筥二合。御雙紙

筥以上自御所被出之御使常陸前司將軍家出御

其庭。

十七日 辛亥天晴。將軍家依御櫓。今日鷲里御

衆事延引。

廿五日 巳未霽 將軍家若宮御魚味左京兆相
州以下人之被出仕丑刻佐々自谷燒亡

廿九日 癸亥霽 陰或小雨今日御息所并若宮

姬始入御左京地小町御亭是將軍家自明日依二
所御精進也

卅日 甲子天晴 將軍家御參鸛野八幡宮還御
之後被始二所御精進

二月小

一日 乙丑陰 雨降晚況交兩降希代恠異也粗
考舊記垂仁天王十五年丙午星如雨降 聖武天

皇御宇天平十三年辛巳六月戊寅日夜洛中飯下
同十四年壬午十一月陸奧國丹雪降光仁天皇御

宇寶龜七年丙辰九月廿日石瓦如雨自天降同八

年雨不降井水斷云此等變異雖上古事時災也而

泥雨始降於此時言語道斷不可說云

五日 巳巳天晴 二所奉幣御使進發

九日 癸酉天晴 午尅二所奉幣御使歸參其後

御息所并若宮自左京兆御亭入御之所彈正少弼

業時中務權大輔教時候御輿寄其外數輩供奉及

還御之期左京兆被奉御引出物若宮御方御劔彈

正少弼持參之御馬置鞍左近大夫將監時村伊賀

左衛門次郎元清又一疋襪相摸六郎政頼伊賀左

衛門三郎朝臣等引之御息所御方砂金南庭等内
々被進之

十日 甲戌雨降 日中屬晴將軍家於鞠御坪御馬御覽薩摩七郎左衛門尉祐能伊東刑部左衛門尉祐賴波多野兵衛次郎定康等騎之士御門大納言八條三位候公卿座一條中將能清中御門少將公仲等朝臣左近大夫將監義政暉正少弼葉時以下候北廣廂

廿日 甲申霽 寅尅於御所被行變異等御祈主殿助葉昌 大學助晴長 修理亮晴秀晴憲大藏權大輔泰房 晴平大膳權亮仲光等列座南庭勸七座泰山府君祭將軍家出御縫殿頭師連奉行之去十日十一日有御夢想源亞相同時見夢殊御怖畏云

三月六

五日 戊戌天晴 陰小雨降午尅雷鳴自南方互北降雪大如李其後晴夫酉尅又雷鳴數聲凡無時吉文之趣甚不快云春霞下大兵起五穀不熟人民餓死云但戊巳雷鳴有吉文之由有省申之輩
六日 己亥天晴 今曉木立權頭親家為内々御使上洛又諸人訐論事被止引付沙汰問註所召怒訐陳狀可勘申是非也前々被記申訶之間為被賦九人評定衆所被結番也
御評定日々奏事結番次第不同。

一番 二日 十三日 廿三日

尾張入道見西 越前々司時廣

宮内權大輔時秀

伊賀入道之圓

和泉入道行空

二番 六日 十六日 廿六日

越後守實時

中務權大輔教時

出羽入道道空

信濃判官入道行一

對馬前司倫長

三番 十日 廿日 晦日

秋田城介泰盛

縫殿頭師連

少卿入道心蓮

伊勢入道行願

一番衆 一日 十五日 廿一日 二番衆 五日 廿一日

三番衆 十一日 廿五日

政所問注所及執事每日可令衆也且自問注所

每日可登進文士二人也

十一日 甲辰天晴 彈正少弼業時朝臣室北

君 男子御平產

十三日 丙午天晴 暮雨下今日姬君御五十日

百日之儀也又就諸人訥論事有被定篇自等所謂

御評定日々當衆奏事

兼日可被付各自於勘解由判官

一事書事

御評定之後執事之仁令進草案事書者被加

一見理致無相違者可被付對馬前司也

廿七日 庚申天晴 相摸左近大夫將監家政家

務殊無行云

廿八日 辛酉 仰放遊之士可被林藪鷹狩之旨

目來有其沙汰所被施行于諸國守護人也其狀云

鷹狩事

右祭之外禁制先畢仍雖備于供祭非其社領縱雖
為彼社領非其社官者一切不可仕得之由可令相
觸其國中若有違犯輩者愆可註申交名之狀依仰
執達如件

文永三年三月廿八日

相摸守
左京權大夫

某殿 守護人

廿九日 壬戌天晴 此間刑部卿宗教朝臣就蹴

鞠事作一卷勘狀將軍家密之被召出覽之是去文

應二年正月十日御鞠始之日當職廷尉出羽行有

上野廣經是利家氏等列其庭廣經家氏上括之間

此朝臣當日頻傾申之處同八月十九日旬御鞠廣

經重上之而經年序之訖見其三輩之吉凶被數代

之例證故草之云載于狀之趣者蓬宮仙洞之間之

供奉臨幸之臣云衆候蹴鞠之輩專札之時無上括

之儀 清和天皇御宇天長元年被始置使廳以降

天子昇霞九重之迴祿騷動獄舍巡見等 依為楚

忽之儀上之此外之時上括之輩先規多以非吉事

所謂後白河法皇御時安元治承之比康賴信房上

之同意于成親卿之謀叛共配流出家壽永元曆之

比知康光經上之光經者木曾合戰於其場失命知

康者遂坐事出家順德院御時承父之比云康元宗仲
上之同二年後鳥羽法皇熊野山臨幸之時光俊朝
臣于時上之同三年洛中洪滅彼朝臣并康光家仲
等果出家遁世後堀河院御時繁茂行經上之天福
元年有藥壁門院御事同亡卒饒姑射山崩御四條
院御宇嘉禎之比光葉上之無程出家早世同仁治
之比行親行盛上之至尊愛駕其後行盛依准右事
出家當代知親上之于時實治之曆果然明從境起
云
廿日 癸亥天晴 於御所和歌御會二條左兵衛
督教定宮内卿入道禪惠遠江前司時直越前々司
時廣左馬助清時右馬助時範周防判官忠景若宮

大僧正等衆候僧正被獻風流一脚

四月小

五日 戊辰天晴 將軍家有御小瘡醫師等衆上
御療治事及其沙汰

七日 庚午 朝雨下陰南風烈將軍家御蚊觸之
間可有蛭啗之由施藥院使忠茂朝臣申行之而依
三嶋社神事憚否被問陰陽道無御衆社之儀何可
有憚哉之由申之又被尋社司之處同申無憚之由
仍有此御療

八日 辛未天晴 前左兵衛督正三位藤原朝臣
教定率日來所煩瘡也

十五日 戊寅 長門國一宮神人等致殺害沙汰

之由事。守護人資平就註申子細有其沙汰并狼籍
事可令奉行由資平雖申之守護沙汰事被定式自
畢而為守護之身補國檢非違使之條不可然云
廿一日 甲申霽 甲乙人等數十人群集于比企
谷山之麓自未尅至酉尅向飛礮爾後帶武具起闖
諍夜廻等馳向其所生虜張本一兩輩被禁籠之所
殘悉以逃亡關東未有此事京都飛礮猶以為狼籍
之基固可加禁遏之由前武州禪室執權之時有其沙
汰被仰六波羅畢况於鎌倉中哉可奇云
廿二日 乙酉天晴 依將軍家御惱事以松殿僧
正為驗者可護身之由及御沙汰云
五月小

一日 癸巳陰 自去夜黑雲掩天日蝕不正見御
祈三位僧都乾榮也祈禱玄應殊依有御感被送遣
銀劔一腰鞍馬一疋也
廿四日 丙辰天晴 依御惱事於廣御所被給行
五大尊合行法若宮大僧正卒伴僧八口奉仕之
廿五日 丁巳 相州令衆御所給云
廿六日 戊午 御惱事當于御修法結願之日可
看御減氣之由大阿闍梨申入之云
六月小
一日 壬戌天晴 依為鬼宿曜御修法結願云御
惱聊御平驗云阿闍梨兼日申狀符合之由及口遊
云六

五日 丙寅天晴 木工權頭親家自京都歸來自

仙洞内之有御諷諫等云云中御所御事云云

十九日 庚辰天晴 於相州御亭有深秘御沙汰

相州左京兆越後守實時秋田城介泰盛會合此外

人之不及及參加云云今日松殿僧正良基退出御所中

逐電有子細云云

廿三日 甲申 酉刻御息所并姬宮俄以入御山

内殿若宮入御相州亭仍人多以馳象彼所凡鎌

倉中騷動不知其故云云

廿四日 乙酉霽 子刻大地震今日左大臣法印

嚴慧遁世晦跡云云 近國御家人如蜂競集余屋

滿卷云云

七月大

一日 辛卯 雷雨御家人等或破關有奔象于鎌

倉之輦或迴路有密衆之類皆帶兵具隱居邊土民

及酉刻俄騷動群集之輦加小具定帶弓箭然而無

事而暮畢

三日 癸巳天晴 曉木犯五諸喉等三星自今曉

民間不安或破壞家室或運隱資財是皆怖戰場之

故歟已一點甲冑軍士揚旗自東自西馳集窺象相

州門外次於政所南大路相一同時音其後少卿入

道心蓮信濃判官入道行一等為相州御使象御所

往還及兩三度云云先如此軍動之時將軍家入御執

權亭又可然人々衆管中奉守護之歟今度無其儀
世以恠之朝馴暮老近臣之類皆出周防判官忠景
信濃三郎左衛門尉行章伊東刑部左衛門尉祐賴
鎌田次郎左衛門尉行俊澁谷左衛門次郎清重等
計相殘御所中云

四日 甲午天晴 申尅雨降今日午尅騷動中務

權大輔教時朝臣召具甲冑軍兵數十騎自藥師堂

谷亭至塔辻宿所依之其近隣弥々成群動相州以

東卿八郎入道令制中書之行辨給無所于陣謝云

戊尅將軍家入御越後入道勝圓佐介亭被用女房

輿可有御歸洛之御出門云 供奉人

土御門大納言 同中將 同少將

木土權頭親家

同子息左衛門大夫景教 同兵衛藏人長教

女房 一條局 別當局 兵衛督局

尼右衛門督局

此外 相摸七郎宗頼 大宰權少貳景頼

路次出御自北門赤橋西行經武藏大路於彼橋前

奉向御輿於若官方暫有御祈念及御詠歌云

供奉人

相摸七郎宗頼 相摸六郎政頼

遠江前司時直 越前々司時廣

彈正少弼業時 駿河式部大夫通時

尾張四郎篤時 越後六郎實政

周防判官忠景

佐々木壹岐入道生西

小山四郎

伊東刑部左衛門尉祐頼

武藤新左衛門尉景泰

甲斐三郎左衛門尉為成

此外

一條局

別當局

右衛門督局

民部卿局

小宰相局

侍從局

越後

加賀

但馬 春日

北日 庚戌天晴

戊刻前

將軍家御入洛著御左

近大夫將監時茂朝臣六波羅亭

新刊吾妻鏡卷第五十二終

城彌九郎長景

河越遠江權守經重

和泉左衛門尉行章

和泉藤内左衛門尉

出羽七郎左衛門尉

土師氏玄同攜其舍弟聊卜來而語余曰方今世之見東鑑者滔滔皆多也而郡鄉村里之號氏族姓尸之字官家僧道之目古今名物之稱方言俗談往往未易讀也况又其閒文字純繆書寫脫略乎見者病之今聊卜點倭訓于其旁其或所未安者乃闕疑而俟後之是正因附劄

東坡詩集
刷氏新鑿於梓蓋爲此書之一
得耶願乞一言以託不朽余始
拒之曰豈外求哉子宜自爲之
既而復乞之至于再三而不已
於是記其所以語余者如是及
至其板成則紙貴而益售耶可
不謂便於童蒙之見者乎若夫
國家之盛衰世道之得失可以
鑒戒可以資治者姑待異日之

評遂書以爲跋

寬永甲子之春

羅洞散人

林道春書



寬永三年三月日

菅聊卜刊正

朝録
二

雜錄

1
~~...~~
...

